

昭和四十二年度

日本思想史関係研究文献要目

凡 例

一、本要目には、昭和四十二年一月から十二月までの一年間に発行乃至発表された日本思想史関係の単行本（初版本のみでなく重版本も含む）並びに雑誌・紀要の論文を選択収録した。

一、本要目には、日本思想史関係の学術的な研究を選択収録することを原則としたが、一般読者向けのものも適宜収めた。

一、右のように選択した文献を、Ⅰ単行本目録・Ⅱ雑誌・紀要論文目録の二部に分け、次のように配列した。

ⅠⅡ部とも、文献をその内容によって、総雑・古代・中世・近世・近代に分け、さらにそれぞれに属する思想史関係研究文献を、一般・学問道徳教育方面・宗教方面・文芸美術芸能方面・政治社会経済方面・その他の項目順に分類配列した。

単行本は、書名・著者名・発行所名の順、論文は、題名・執筆者名・掲載雑誌紀要巻号数の順に記載した。

一、本要目の作成には、東北大学文学部日本思想史学研究室所属の助手・大学院学生が協力してあつた。
なお日本思想史学会の委員方の御助言を戴いた。

一、日本思想史という学問の性格上から、研究文献の選択に迷うことが多く、短時日の間に作成したためもあつて、文献の選択や配列に不備の点があるものと考えられる。大方の御教示をお願いする。

I 単行本目録

総 雑

日本文化史
日本文化史研究
日本 歴史と文化 下
図説日本文化史大系

家永三郎 岩波書店
今中寛司 三和書房
林屋辰三郎 平凡社

9 江戸時代 上

岡田章雄編 小学館

10 " 下

麻生磯次 " " "

11 明治時代

阿部公正 " " "

12 大正昭和時代

小西四郎 " " "

文学に現はれたる国民思想の研究 1・2・3・5

津田左右吉 岩波書店

日本人の精神史 2・3・4・5・6

亀井勝一郎 文芸春秋

日本の精神構造論序説

池田昭 勁草書房

美と宗教の発見

梅原猛 筑摩書房

恥の文化再考

作田啓一 " " "

日本哲学思想史

永田広志 法政大学出版社

体系日本史叢書 19 科学史

杉本勲編 山川出版社

日本科学技術史大系 3
通史(教育編)

日本科学史学会 第一法規出版

日本倫理思想史 上・下

和辻哲郎 岩波書店

近代日本の名著 6

永井道雄編 徳間書店

日本宗教史研究 1

笠原一男他 法蔵館

日本仏教史

家永三郎・赤松俊秀
・圭室謙成 監修

I 古代篇

II 中古篇

III 近古・近代篇

日本仏教概史

宇井伯寿 岩波書店

日本の仏教

渡辺照宏 " " "

日本の仏教

中村恭子 筑摩書房

2 靈異の世界

王生台 舜 " " "

3 叡山の新風

宮坂宥勝 " " "

4 人間の種々相

石田瑞磨 " " "

5 悲しき者の救い

数江教一 " " "

6 本願念仏のえらび

柳田聖山 " " "

9 臨済の家風

増谷文雄 " " "

10 仏祖正伝の道

秋月龍珉 " " "

12 禅門の異流

田村芳朗 " " "

13 予言者の仏教

脇本平也 " " "

14 近代の仏教者

渡辺照宏 " " "

15 日本仏教のこころ

宝田正道 弘文堂新社

日本仏教文化史攷

宝田正道 弘文堂新社

仏教と人生 — 日本歴史の特性 —

仏教文学研究 5

八幡信仰史の研究

民間信仰

日本の新興宗教

— 大衆思想運動の歴史と論理 —

2 万葉びとの世界

3 宮廷サロンと才女

4 復古と革新

5 愛と無常の文芸

6 文学の下剋上

続・日本文芸史

— 日本文学理念の展開 —

折口信夫全集 18 芸能史編2

日本美術教育史

茶道盛衰記

日本史上の天皇

夢 — 日本人の精神史 —

殉死

— 悲劇の遺産 —

古代

原始文化ノート

金倉太郎

坂本太朗

中野幡能

堀 一郎

高木宏夫

秋山内市之助

中山理三

山藤謙三

佐藤三三

竹内義博

角源三

岡見正雄

林屋辰三郎

瀬古 確

山形 寛

山形 寛

原田伴彦

水戸部正男

古川哲史

古川哲史

古野清人

帝國学地方

行政学館

法蔵館

岩波書店

吉川弘文館

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

角川書店

紀伊国屋書店

日本繩文文化の研究

日本文化の起源

— 縄文時代に農耕は発生した —

新稿日本古代文化

十七条憲法講話

— 聖徳太子会シリーズ5 —

鑑真和上

沙門空海

新・弘法大師伝

郷土研究ノート30「関東における真言密教の弘通とその伝承」

— 亀頂山三寶寺考 —

源氏物語の仏教思想

浄土教の展開

日本神話の世界

日本神話の起源

古事記の世界

— 文学と歴史のあいだ —

万葉

— 文学と歴史のあいだ —

平安朝文学の色相

天皇の系譜と神話

— 武家時代の社会と精神 —

— 中世武家家訓の研究 —

— 東山時代に於ける一縉紳の生活 —

中谷治宇三郎

江坂輝弥

和辻哲郎

白井成允述

安藤更生

渡辺照宏・宮沢宥勝

宮崎忍勝

木村 博

重松信弘

石田瑞麿

上田正昭

大林太良

西郷信綱

吉永 登

伊原 昭

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

吉井 巖

昭森社

講談社

岩波書店

聖徳太子会

吉川弘文館

筑摩書房

大法輪閣

練馬郷土史研究会

平楽寺書店

春秋社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

創元社

浄土系思想論

仏教と文学

中世日本の思想と古典

鎌倉仏教

—親鸞と道元と日蓮—

講座禅 4 禅の歴史

—日本—

禅の文化

親鸞教学の日本学的研究

歎異抄の世界 1・2・3・4

親鸞ノート・続親鸞ノート

御伝鈔の研究

道元の実践哲学構造

日蓮上人御遺文

日蓮

—その生涯と思想—

日蓮聖人遺文大講座 2

日蓮聖人遺文講座 4

日蓮

—書簡を通してみる人と思想—

—一休禅師を通して見た

宗教の世界

藤原定家研究

世阿弥研究

鈴木大拙 法蔵館

西田正好 桜楓社

戸頃重基 中央公論社

西谷啓治編 筑摩書房

古田紹欽 角川書店

小野正康 山喜房仏書林

伊藤慧明 文栄堂書店

服部之総 福村出版K・K

梅原真隆編 永田文昌堂

高橋賢陳 山喜房仏書林

加藤文雄 //

久保田正文 講談社

小林一郎 日新出版

田中応舟 本聖堂

増谷文雄 筑摩書房

板倉豊 至文堂

安田章生 至文堂

西一祥 さるびあ出版

庶民の文化

—江戸文化と歴史への道標—

日本近代化と宗教倫理

—日本近世宗教論—

徳川思想史研究

江戸幕府と朱子学

中江藤樹

心学

忘れられた思想家 上・下

—安藤昌益のこと—

長崎洋学史 下

小石元俊

三浦梅園

緒方洪庵伝

吉田松陰

横井小楠

横井小楠評伝

日本切支丹宗門史 上

近世初期日本関係

南蛮史料の研究

かくれキリシタン

—歴史と民俗—

維新前夜の文学

小堀遠州

幕末日本

—異邦人の絵と記録に見る—

黒船前後

田中伸 富士書院

ベラー(堀一郎 池田昭訳) 未來社

田原嗣郎 //

和島芳男 大阪俱樂部

清水安三 東出版

柴田実 至文堂

ノーマン(大窪愿二訳) 岩波書店

古賀十二郎 長崎学会

山本四郎 吉川弘文館

田口正治 //

緒方富雄 岩波書店

奈良本辰也 //

圭室諦成 吉川弘文館

佐々木憲徳 文化新報社

パジエス(クリセル神父校閲・吉田小五郎訳) 岩波書店

松田毅一 風間書店

片岡弥吉 日本放送出版協会

杉浦明平 岩波書店

森 蘊 吉川弘文館

エメエ・アンベール(茂森唯士訳) 東都書房

服部之総 筑摩書房

近世

日本ルネッサンス史論 福本和夫 東西書房
—一六六一—一八五〇年に至る日本ルネッサンス—

江戸時代の地図に関する研究 木林 東一郎
 光太夫の悲恋 亀井 高孝

近代

有賀喜左衛門著作集 第四
 封建遺制と近代化 未 来 社
 服部之総著作集 一〜七 理 論 社

羽仁五郎歴史論著作集一〜四 青 木 書 店

共同研究 明治維新 思想の科学研究 会 編

近代日本の精神構造 神島 二郎 岩 波 書 店

土着の思想 判 沢 弘 紀伊国屋書店

講座 日本社会思想史 住谷悦治・山口 芳賀書店

1 明治社会思想の形成 光朔・小山仁示 他編

2 大正デモクラシーの思想 //

3 昭和の反体制思想 //

4 反動期の社会思想 //

5 社会思想の現潮流 //

近代日本の理性 鈴木 正 勁草書房

維新の精神 藤田省三 みすず書房

日本の思想界 中村雄二郎 勁草書房

日本の思想 丸山真男 岩波書店

「明治維新」の哲学 市井三郎 講談社

福沢諭吉 河野健二 //

—生きつつける思想家—

福沢諭吉 福沢諭吉 白石・諭吉 鹿野政直 清水書院

馬場辰猪 萩原延寿 中央公論社

中江兆民 松永昌三 柏 書 房

幸徳秋水研究 糸屋寿雄 青木書店

熊本洋学校とその周辺 松井康秀 浩文社出版部

現代日本教育政策史 海老原治善 三一書房

明治前期教育行政史研究 金子照基 風間書房

体育思想史序説 水野忠文 世界書院

明治の女子教育 日本女子大学女子教育研究所編 国 土 社

明治の教育 仲々崎 新 至 文 堂

私学の歴史 伊々崎 曉 生 新日本出版社

近代日本道徳教育史 確田 登 紀 高陵社書店

植村正久とその時代補遺索引 安里彦 紀 教 文 館

内村鑑三 関根正雄 清 水 書 院

内村鑑三と現代 鈴木俊郎 岩 波 書 店

有馬四郎助 三吉 明 吉川弘文館

非戦の思想 伊谷隆一 紀伊国屋書店

—上着キリスト者 柏木義円—

近代日本文化とキリスト教 辻橋三郎 教 文 館

日本キリスト教史論 高道三基 新 教 出 版 社

人間観の相剋 石原清謙 弘 文 堂 新 社

—近代日本の思想とキリスト教—

土着と背教

—伝統的エトスとプロテスタント—

戸塚神父の生涯

日本キリスト教合同史稿

明治文学研究 8

政治小説研究上

日本浪漫主義文学研究

(改訂増補版)

石川啄木と大逆事件

宮本百合子

—抵抗に生きた大正精神—

右翼の歴史

続日本経営理念史

明治大正昭和の経営理念

明治初期の思想

明治前期の憲法構想

日本立憲国家の成立

—明治初期政治思想に関する一考察—

日本近代憲法思想史研究

日本外交思想史論考 2

—統条約改正論の展開—

講座日本近代法発達史 11

近代日本における制度と思想

近代日本政治構造の研究

大正デモクラシーの社会的形成

柳田国男の思想

アナキズム思想史

西田・三木・戸坂の哲学

—思想史百年の遺産—

武田 清子 新教出版社

小田部 胤明 中央出版社

都田 恒太郎 教文館

柳田 泉 春秋社

片岡 良一 法政大学出版局

吉田 孤羊 明治書院

島 為男 桜楓社

都築 七郎 翼書院

土屋 喬雄 日本経済新聞社

淡野 安太郎 勁草書房

家永三郎・松永昌三・江村栄一編 福村出版K・K

ピタウ (内田文昭訳) 時事通信社

家永三郎 岩波書店

稲生 典太郎 小峰書店

鶴飼信成等編 勁草書房

中村 雄二郎 未来社

石田 雄 //

金原 左門 青木書店

中村 哲 法政大学出版局

大沢 正道 現代思潮社

宮川 透 講談社

日本マルクス主義理論の形成と発展

現代日本の哲学

現代日本の思想

シンポジウム現代日本の思想

—その五つの渦—

II 雑誌・紀要論文

総 雑

日本文化論の理論的基礎

—プロシエクト「日本民族性の比較文化論的研究」のために—

日本庶民文化の特質

日本文化と仏教

日本文化と禪

日本人の思考と日本語

日本文化論と現代人類学

—「菊と刀」の方法をめぐって—

日本儒学の特質

現代日本における歴史学の課題

歴史の「理」

—歴史における物語性—

唯物史観の形成と

—歴史のことば—中の2—

—日本の唯物論—

—歴史的概観—

守屋 典郎 青木書店

西谷 啓治編 雄渾社

久野 俊輔 岩波書店

鶴見 六郎 三省堂

日高 六郎 三省堂

石田 英一郎 日本文化研究所

藤木 邦彦 東洋学術研究所

梅原 猛 理想 五一〇

古田 紹欽 国学院大学日本文化研究所紀要 二〇〇

大野 晋 文学三五—一二

鈴木 満男 理想 五二二

阿部 吉雄 講座東洋思想二〇

犬丸 義一 歴史評論二〇一

林屋 辰三郎 立命館文学二五

神川 正彦 人文研究(神奈川大) 三七

伊藤 晃 史潮 一〇〇

船山 信一 立命館文学三三

日本における法的思考の発展と基本的人権	石田雄	社会科学研究 一八一六
新反動史学の特質 —現代的皇国史観について—	平田哲男	歴史評論二〇五
和辻哲郎と「倫理学」	勝部真長	中央公論三—二
宗教研究の方法 —日本における宗教学の歴史と課題—	上田賢治	宗教研究四—四
特集・日本の仏教	家永三郎	思想の科学六九
日本仏教の政治性	今井淳	理想 四一〇
仏教と日本のエトス	井上光貞	〃
日本仏教の歴史的背景	井上光貞	講座東洋思想二〇
禅思想の日本的展開	圭室諦成	駿台史学 二〇
日本天台の国家観	竹田鳴典	印度学仏教学研究 一五—二
密教の日本的展開	勝又俊教	講座東洋思想二〇
真宗の世界観	普賢大円	竜谷大学仏教文化研究所紀要六
神道と仏教(上・中・下)	堀一朗	講座東洋思想二〇
招魂社の源流	加藤隆久	神道史研究 一五—五・六合
烏勸請 —東亜・東南アジアにおける穂落 —神話に対応する農耕儀礼—	大林太良	東洋文化研究所紀要 四〇
稲荷神	及川大溪	岩手史学研究 四一
神宮根拠の学(構想序説)	幡掛正浩	神道史研究 一五—一
神道の根本問題 —神道祭祀学を中心として—	岩本徳一	神道宗教 四五
外人による神道研究の成果 —ロスとエルベールの業績—	上田賢治	〃 四三
神道の教義について	梅田義彦	〃 四五
神道の根本問題 —特に国史・国体との関係を中心として—	三淵信吾	〃
神道における教 —特に「正直」について—	谷省吾	神道宗教 四五
神道における幽界の問題	田中初夫	〃
神道の思考	森田康之助	〃
神道について—上—	肥後和男	神道学 五五
神霊観の一面	西角井正慶	神道宗教 四五
神ながらの道と社会主義に 関する一考察	三淵信吾	〃 四六
家の宗教	棚町健之助	世紀 二〇五
俗信	今野円輔	国文学三二—九
宗教集団の類型とその 社会的特質	山口素光	密教文化 七六
死の禁忌の社会的機能 —社会的な人格残存と寡婦規則の問題—	大森元吉	民族学研究 三二—一
日本における文芸の自覚	岡崎義恵	国文学 一一—一〇
祖師観 —文学からのアプローチ—	今成元昭	大崎学報一二—二
制度と社会についての 基礎理論・序説	中村雄二郎	哲学(日本哲学会) 一七
階級闘争理論の検討(一)	深谷克己	民衆史研究五号
近代日本人の伝統理解の 様式について	湯浅泰雄	伝統
歴史学における民族問題	神田文人	歴史評論二〇〇
和辻哲郎と伝統の問題	生松敬三	伝統
家の意識	木村正中	国文学解釈と鑑賞 三二—三
丸山真男の思想と方法 —現代における「巨匠」—	古田光	潮 八八
日本文化研究をめぐる方法的 争点 —あらたな出発点としての回顧と展望(対談)—	村武精 一他	季刊社会科学 一二
「明治百年」と国民の歴史意識	荒井信一他	歴史学研究三〇

中国思想の日本的展開

史的概観

現代における天皇制研究の課題

石田瑞磨「日本仏教に於ける戒律の研究」

桜井徳太郎「民間信仰」

直江広治著「屋敷神の研究」

日本科学史学会編「日本科学技術史大系・教育編(全三卷)」

古代

擦文文化初頭の問題

日本稲作起源論の意義

稲作文化伝来に関する諸問題

外来文化撰取の姿勢と態度

白鳳と天平の時代

上代思想における情と意

「聖徳太子」について

古代葬制と殯官挽歌と

日本古代の墓誌について

嘉元三年見行草について

日本紀略の原拠について

伊野部重一郎氏の批判に接して

校訂・家伝下(武智曆伝)并「家伝下」の本文批評

歴史物語について

阿部吉雄

講座東洋思想

黒田俊雄

歴史評論二〇二

土橋秀高

仏教学研究

宮家準

史潮 一〇一

岩崎敏夫

〃 九九

本庄良邦

教育学研究 三四―二

齋藤傑

古代文化 一九―五

八幡一郎

上智史学 一二

江坂輝弥

考古学雑誌 五二―四

井上薫

日本史の研究 五七―九

笠井昌昭

文化学年報 一六

森田康之助

神道学 五三

林宗相

朝鮮学術通報 四―五

柱芳久

芸文研究 一八

丸子亘

立正大学人文科学研究所年報 四

桃裕行

東大史料編纂所報 一

柳宏吉

続日本紀研究 一三七

植垣節也

〃 一三六

松村博司

金沢文庫研究 九―五

考古学上から見た古代祭祀の様相

五世紀における祭祀

古代における祭祀形態の変化とその要因(共同課題・変化)

日本仏教の発端

「金光明経」の受用と飛鳥仏教

勝鬘経義疏に見える「仮説」の一句について

勝鬘経義疏における生死の問題

思想的に見た「法華義疏」の一特徴

三経義疏と天寿国繡帳の関係

道慈伝の問題点

平安仏教と鎌倉仏教

日本人の哲学的思考の様式をめぐって

初期の天台思想

上古日本天台における本覚法門展開上の限界

伝教大師の入唐求法と四宗の相承

「法華験記」にみる日本神祇とその関連者

「顕戒論」に現われた批判精神

宗祖と慈覚・智証

要鹿奔先生への疑義

良源の「二十六箇条起請」制定の意義

宇治拾遺物語における叡山仏教

弘法大師法考 2

弘法大師と真言宗の成立

大場磐雄

神道宗教 四四

梶山林

〃 四二

小出義治

人類科学 一八

田村芳朗

講座東洋思想

田村円澄

史淵 九八

渡部孝順

印度学仏教学研究 一六

金治勇

〃

望月一憲

〃

宮井義雄

日本仏教 二六

朝枝照雄

竜谷史壇 五八

湯浅泰雄

学習院大学文学部研究室年報 三

田村晃祐

講座東洋思想

浅井円道

印度学仏教学研究 一六―一

武田賢寿

同朋学報 一四・一五

鈴木治美

印度学仏教学研究 一六―一

仲尾俊博

密教学 四

浅井円道

大崎学報 一二二

堀大慈

史窓 二五

渡辺守順

印度学仏教学研究 一六―一

高見寛恭

密教学 三

中野義照

印度学仏教学研究 一五―二

弘法大師の教学
空海の即身成仏思想

「三教指帰」成立考

平安時代の高野山参詣記について

日本真言密教における理解と方法

真言密教における事相の史的
研究—1—

会津における古代仏教
—その性格と布教者—
太子伝と太子信仰

妄尽還源觀の思想的意義
八十三世紀における仏教者
の社会的姿勢について

遊行宗教家

仏教と文学

—「日本靈異記」を中心に—
大江匡房の「続本朝往生伝」
撰述について

今昔物語集卷十五と法華験記

「阿弥陀仏」二題

—紫式部日記・方丈記のアイロニー—

永観における浄土思想形成の
一面

智光の浄土教思想

日本文化の原型

—カミ觀念の生成をめぐって—

上代におけるいわゆる「神人
分離」の問題について

神代と人代

大山公淳

新本豊三

中垣内清貴

和多昭夫

平岡定海

初崎正純

早川征子

林幹弥

鎌田茂雄

石川康明

五来重

古田紹欽

明石光磨

黒部通善

榎克朗

大谷旭雄

普賢晃寿

岩田慶治

武谷久雄

繩田二郎

密教文化志・兵

廣島大学文学部

紀要 二六一—一

園田学園女子大

学論集 一—一

印度学仏教学研

究 一五—二

密教学 三

〃

日本歴史二三三

日本仏教 二六

南都仏教 二〇

大崎学報一二二

国文学解釈と鑑

賞 三二—九

講座東洋思想二

史窓 二五

同朋学報合

一四・一五

大阪芸芸大学紀

要(人文科学)五

日本仏教 二六

真宗学 三・三

東洋学術研究

五—一〇

日本大学理工学

部一般教育教室

彙報 八

神道学 五四

先祖と氏神

常世神から志多羅神へ

—外来神觀と古代民衆信仰—

スサノオノミコト

—古代神觀の一考察—

社殿發生の一考察

三蔵考

齋人

—古代民俗宗教の一基調—

神国造 上・下

神国造から神郡司へ

—井上光貞氏の建部年代記について—

ヤマトタケル物語と伊勢神宮

—鍛冶技術民間伝承の観点—

皇位の世襲と宮中祭祀

皇室神話の二元性の問題をめ

ぐる歴史民族学と神道学プロ

パ

伊勢神宮の初祀

豊前国宇佐八幡社祭神考

高瀬神社の創祀と発展

—越中国式内社の一考察—

鎮花祭一斑—上—

倭大魂神と大倭氏の盛衰

—特に大倭氏の租珍彦と神武東征と
の關係について—

有賀喜左衛門

山上伊豆母

西田長男

松宮兼房

沼部春友

上井久義

藁田俊彦

〃

金井清一

井手成三

戸田義雄

〃

西田長男

筑紫豊

米沢康

西田長男

滝川政次郎

〃

池田源太

久保田収

水野祐

〃

〃

〃

民族学研究 三二—三

国学院雑誌 六八—五

神道宗教 四五

〃 四六

〃 四二

史泉 三三

神道史研究 一五—一・二

国学院雑誌 六八—三

文学 三五—七

神道宗教 四六

〃 四五

国学院大学日本文化

研究所紀要 二〇

大和文化研究 一二—二

神道史研究 一五—二

〃

国学院大学紀要六

神道学 五四

皇学館大学紀要五

武蔵野女子大学

紀要 二

〃

九

高野山における神仏習合の問題 久保田 収 神道史研究 一五―三・四

修験道の馮祈禱 ―そのメカニズムと世界観― 宮家 準 哲学(三田哲学会) 五〇

修験道における祭の論理 わが国における古代白水郎の研究 鴻 巢 隼 雄 神道宗教 四三 国語と国文学 四四―八

―主として中国白水郎の巫祝の生態に關する試論― 菊 池 武 歴史教育 一五―四

奈良時代の藤原氏と仏教 延暦年間における神祇行政集中化の意義 熊 谷 保 孝 政治経済史学 〇

藤原良房政権と僧侶(上・下) 彦 由 栄 子 〃 四九・五〇

―貞観寺真雅を中心に― 大 山 仁 快 印度学仏教学研究 一五―二

高野山現存の古聖教 繩 田 二 郎 広島女子大学紀要 二

日本神話の体系化について 神武記紀を巡って(一・二・三) 笹 谷 良 造 大和文化研究 三一―三三

―古事記構成論― ヤマトタケル伝承の基礎的考察 ―その祖型― 黒 沢 幸 三 文学 三五―四

古事記偽書説の歴史とその意義について 鈴 木 祥 造 歴史研究(大阪教大) 五

古事記及び日本書紀の成立の研究 平 田 俊 春 防衛大学校紀要 一四

柿本人麿の世界 ―土形娘子挽歌をめぐって― 尾 崎 暢 殃 国学院雑誌 六七―一二

柿本人麻呂の方法と精神 ―天皇・皇子を主題とする作品をめぐって― 秋 間 俊 夫 日本文学 一五―一一

高市皇子尊殯宮挽歌の論 ―文学と歴史のあいだ― 桜 井 満 国学院雑誌 六八―一一

赤人歌発想の一考察 千 葉 紀 胤 〃 六八―一二

山上憶良 ―人と思想― 市 村 宏 文学論藻 三七

山上憶良に関する一考察 ―政治意識とその成立をめぐって― 木 戸 季 市 文化史学 二二

憶良の「世間」―上・下― 川 口 常 孝 語文(日大) 二五・二六

初期万葉における天皇歌の問題―三― 深 浦 正 文 論究日本文学 三〇

国文学に及ぼせる仏教思想の影響 野 村 精 一 仏教学研究 一八・一九

―特に「万葉集」について― 古今集歌の思想 野 村 精 一 日本文学 一五―一一

―文体史的考察― 平安朝に於ける文章の経国的性格の変色 池 田 源 太 竜谷史壇 五八

源氏物語の世界構造 平 木 茂 日本文芸研究 一八―一

思想と表現 竹 西 寛 子 文学 三五―六

―源氏物語の場合― 標川の僧都の二面性 岩 瀬 法 雲 園田学園女子大学論文集 二

―源氏物語における人物の造型について― 源氏物語と民間信仰 神 谷 吉 行 相模女子大学紀要 二七

―ヒロインの死をめぐって― 大鏡の藤原道長批判 山 中 裕 文学 三五―八

平安朝第六期における類聚集成運動 萩 谷 朴 二松学舎大学論叢 S 四一

―歴史物語に見るその懐古的動機― 今昔物語集の説話受容態度 池 上 洵 一 法文論叢 二一

平安時代における物語観 ―「蜻蛉日記」・「三宝絵詞」を中心として― 菊 田 茂 男 東北大学文学部研究年報 一七

現農耕習俗よりみた銅鐸絵画の解釈について 細 川 光 貞 歴史評論二〇五

藤原時代の美術家たち (上)・(下) 下 店 静 市 史迹と美術 三七―一・二

信貴山縁起絵巻〃尼公の巻〃の考察 笠 井 昌 昭 文化史学 二二

信貴山縁起絵巻 赤 沢 英 二 東京学芸大学紀要 一八

―特に第Ⅱ巻「延喜加持の巻」をめぐって― 後三年合戦絵巻とその思想 河 野 秀 男 日本歴史二二八

仏教伝来の史実と説話
—津田左右吉氏の所論によせて—

田村 円澄 史淵 九五

律令考

佐藤 誠実

国学院雑誌 六八—八

律令制定期における国意識の形態
—その活躍と社会の血統観について—

高橋 吳

紀要(日本大学精神文化研究所) 四

婦化人に関する小論

新野 直吉

秋大史学 一四

太政官成立過程における唐制と国法との交渉

井上 光貞

前近代アジアの法と性質 一〇〇

日本律令制の形成と中国
—開皇七部伎の定置と倭伎とをめぐって—

石尾 芳久

アジア・アフリカ文化研究所研究年報 元六年度

礼楽よりみたる古代日本と中国との交渉

飯塚 勝重

ヒストリア 四八

応神天皇の誕生と神功皇后伝説の形成
—建国説話と母子神信仰—

本位田 菊士

徳島大学学芸紀要(社会) 一六

神功伝承考略

田中 勝蔵

歴史学研究 三三

安康・雄略系皇統の成立とその意識
—継体天皇確立の背景—

本位田 菊士

史元 五

中臣氏伝承の成立と背景

志田 諄一

茨城キリスト教短大紀要 七

物部氏伝承の成立

〃

流通経済論集 一一—一

上代日本の貨幣と貨幣観について
—橘直幹—平安中期の中下級官人—

松好 貞夫

日本歴史 二二—一

日本人の色彩感覚研究(一)
—「八世紀日本人のアカの感覚」についての概略—

阿部 猛

文化史研究 一九

奈良時代の方術

小沢 喜雄

文化史研究 一九

齋藤忠著

下出 積与

金沢大学法文学部論集(史学) 二四

「古墳文化と古代国家」

辰巳 和弘

文化史研究 一九

家永三郎他監修

藤谷 俊雄

日本史研究 九一

井上薫著

山田 英雄

史学雑誌 七六一—四

「奈良朝仏教史の研究」

太田 善磨

国語と国文学 四四—五

田所義行著「儒家思想から見た古事記の研究」

久松 潜一

〃 四四—八

太田善磨著「古代日本文学思潮論(4)」

大久保 正

万葉 六二

沢瀉博士喜寿記念万葉学論叢

遠藤 宏

国語と国文学 四四—九

吉永登著「万葉—文学と歴史のあいだ」

中世

中世文化史と民俗学

和歌森 太郎

国文学解釈と鑑賞 三二—九

鎌倉時代後期の武家社会と文化

河合 正治

広島大学文学部紀要 二六—三

室町文化とその文化財

中村 直勝

月刊文化財 四五

戦国武将の印章と思想

荻野 三七彦

金沢文庫研究 一三—五

鎌倉時代南都学芸の発達

永島 福太郎

大和文化研究 一一—二〇・二

中世における読書始

尾形 裕康

金沢文庫研究 一三—二

愚管抄の成立とその思想

石田 一良

東北大学文学部研究年報 一七

前田本承久記の作者の立場と成立年代

原井 曄

歴史教育 五—三

「神皇正統記」の歴史観

玉懸 博之

日本思想史研究 一

神皇正統記の延元四年初稿本文者のならい(下)

平田 俊春

歴史教育 五—二

戦国時代の倫理想

相良 亨

日本美術工芸 三四—四

「北条実時書状」の武家家訓としての評価 (一) (四)
 室町時代における足利学校の医学教育について
 服部 敏良
 金沢文庫研究 一三一—一四
 芸林 一八一—四

特集・中世日本の宗教と社会
 歴史教育 一五八

中世社会と宗教
 〃
 歴史と文化 九

鎌倉仏教
 講座東洋思想 二〇

初期の浄土思想
 〃
 理想 四一〇

後期の浄土思想
 〃
 理想 四一〇

仏教の虚無主義
 源信と法然の思想を中心に
 菊地 良一
 日本文学 二六一—二

中世僧伝について
 解脱法然親鸞を中心として
 伊藤 唯真
 歴史教育 二一八

初期浄土宗教団の社会的特質
 鎌倉における初期の浄土教
 鈴木 成元
 金沢文庫研究 一三—二

「法想要鈔」における念仏義
 山崎 慶輝
 仏教学研究 一八・一九

鎌倉時代における唯識観の実践
 貞慶の唯識観
 山崎 慶輝
 印度学仏教学研究 一五—二

良遍の唯識教学の特異性
 事理の不即不離に関連して
 山崎 慶輝
 印度学仏教学研究 一五—二

阿弥陀仏報身論
 浄土教の思想的基盤解明の一つとして
 水谷 幸正
 浄土宗学研究 一六・一七

念仏の理解と展開
 賀幡 亮俊
 〃

名号論序説 (1)
 名号論考察のための前提として
 沢田 謙照
 〃

法然上人の証果観について
 西方指南抄を中心として
 浅野 教信
 印度学仏教学研究 一五—二

西方指南抄と歎異抄
 霊山 勝海
 真宗学 三七

法然上人の証果観について
 浅野 教信
 〃 三三・三

法然とその専修念仏
 角田 信三郎
 世紀 二〇九

法然における信の思想
 信楽 峻磨
 真宗学 三七

選択集と本典
 池本 重臣
 真宗研究 一二

「選択集」の中心問題
 白井 元成
 〃

「愚管抄」に於ける法然上人及びその門弟の行動について
 三田 全信
 日本仏教 二七

証空上人の至誠心積について
 紅 楳英
 龍谷大学仏教文化研究所紀要 六

真宗教学史の問題点
 石田 充之
 龍谷史壇 五六・五七

真宗の宿業観
 松原 紹善
 親鸞教学 一〇

念仏往生の「主体性」
 小野 蓮明
 〃

真宗における基礎的論理の研究
 中西 智海
 印度学仏教学研究 一五—二

信の構造と転成の論理
 森 龍吉
 親鸞教学 一一

真宗思想における超越と内在
 社会的観点から
 藤下 洗養
 真宗学 三七

阿弥陀仏と人間の関係
 真宗教義の根底に存する空の意義について
 明石 光磨
 龍谷史壇 五六・五七

初期本願寺教団における宗典成立について
 六要鈔の史的意義
 寺川 俊昭
 真宗研究 一二

末代の僧伽
 真宗教団についての考察
 〃
 親鸞教学 一〇

末代の僧伽
 浄土真宗の教団
 〃
 親鸞教学 一一

親鸞における顕真実の意味
 非僧非俗
 村上 速水
 龍谷大学論集 三八二

撰取不捨の世界
 縁起と親鸞聖人
 藤原 幸章
 〃 一〇

大乗仏教における積尊の地位
 親鸞聖人の積尊観
 岡 邦俊
 印度学仏教学研究 一五—二

中世的人間観の成立
 親鸞の思想をめぐって
 伊藤 博之
 日本文学 一六一—二

転向史のなかの親鸞

後藤 宏行

名古屋学院大学
論集 一二

親鸞聖人の宿業観

矢田 了章

竜谷大学仏教文
化研究所紀要

親鸞聖人における本覚と実存
の問題

中西 智海

真宗学
三五・三六

親鸞における救済の極限概念

石田 充之

宗教研究 〇一・二

親鸞と天台学

横超 慧日

大谷学報 〇一・四

危機に立つ親鸞の念仏

笠原 一男

日本社会経済史
研究(古代中世篇)

親鸞聖人の宿業思想と仏教の
それとの同異

宮地 廓慧

印度学仏教学研究
一六〇一

引用文にみえる親鸞聖人の三
味観

浜田 耕生

同朋学報
一四・一五

坂東本の史料科学的研究

古田 武彦

仏教史学 二二一

念仏弾圧事件と親鸞

河田 光夫

日本文学
一六一七

親鸞寿像にみえる聖的一面

朋石 光磨

真宗研究 一二

親鸞聖人と太子信仰

小島 叡成

印度学仏教学研究
一六一一

親鸞の呪術観

田辺 正英

新潟大学教育学
部高田分校紀要二

善鸞の宗教的立場

重松 明久

金沢文庫研究
一三〇・二二・二二

一遍教学独朗抄

河野 憲善

島根大学論集
(人文科学) 二六

時宗二祖の教学(その四)

菊地 勇次郎

印度学仏教学研究
一六一一

常陸の時宗

鈴木 泰山

茨城県史研究七
愛知大学文学論
叢 三三・三四

日本初期禅宗教団の成立とそ
の宗風―2―

鎌田 茂男

講座東洋思想二

曹洞禅 禅思想の日本的展開

圭室 諦成

講座東洋思想二
北海道駒沢大学

道元禅師研究序説

黒丸 寛之

紀要
思想 五二一

道元における禅の思想的構造

増谷 文雄

思想 五二一

道元の善悪観

笠井 貞貞

倫理学年報一六
印度学仏教学研究
一五―二

一乗開会思想と道元禅師

横井 覚道

印度学仏教学研究
一五―二

道元禅における菩提心思想の
一考察―観無常心と度衆生心
について

原田 弘道

〃

道元の人間観について

中沢 志津男

歴史教育 一五―七

「宝慶記」の一考察

黒丸 寛之

宗学研究 八

不染汚の修証と真空妙有

竹村 仁秀

〃

道元禅師に於ける正法と仏教
との関係について

若山 超関

愛知学院大学論
叢(一般教育研
究) 一五

道元禅における倫理性について

青龍 宗二

宗学研究 八

万法と自己

原田 弘道

〃

唯仏与仏ということ―「正法
眼蔵」の難解について

水谷 洋

文芸研究(明大)
一七

永平正法眼蔵研究序説

増谷 文雄

理想 四一〇

「正法眼蔵」における公案の
扱い方と読解上の問題(四)

伊藤 俊彦

駒沢大学仏教学
部研究紀要二五

道元禅師と瑩山禅師とに關す
る一考察

高橋 賢陳

印度学仏教学研究
一六一一

「正法眼蔵抄」の成立に關
する一考察

高橋 全隆

宗学研究 九

宗学思想史研究序説 3

東隆 真

〃 八

如元格外集(永平五師文集)

東隆真 宗学研究 八

六祖壇經の自性の思想と道元

原田弘道 //

日蓮の思想

坂本幸男 講座東洋思想二〇

日蓮聖人の天台教学受容につ

小松邦彰 大崎学報一二二

日蓮聖人初期の教学について

// 印度学仏教学研究 一五―二

日蓮における十羅刹女信仰の

池上尊義 東海史学 三

位置

大崎学報一二二

日蓮教学における成仏論の

執行海秀 //

展開

田村芳郎 専修国文 一

成仏否定の諸論からみた日蓮

小林智昭 棲神 四〇

教学

上田本昌 歴史教育 一五―八

日蓮の神祇思想

中尾堯 兵庫史学 四八

日蓮上人の神祇観

貫名聡 竜谷史壇 七六

日蓮宗と葬祭

田村隆照 密教文化 七六

兵庫県の法華宗とその石造

恵谷隆戒 竜谷史壇 七六

美術―法華宗教権張史―

田村完誓 講座東洋思想二〇

中世の奈良における融通念仏

木村博 歴史教育 一五―八

文観房弘真と文殊信仰

田村隆照 密教文化 七六

鎌倉時代における円頓戒の復

田村完誓 講座東洋思想二〇

興について

田村完誓 講座東洋思想二〇

中古天台の形成

木村博 歴史教育 一五―八

中世における密教文化

木村博 歴史教育 一五―八

―所謂「密教化」の問題と「法隆寺」―

根本誠 史観 七五

末法思想と鎌倉仏教における

根本誠 史観 七五

その完成

根本誠 史観 七五

末法における仏罰の法民俗

荒井貢次郎 印度学仏教学研究 一六―一

―日本中世武家家法・起請文の場合―

末法思想に関する誠論 町田是正 棲神 四〇

聖霊会ノアレ

林幹弥 日本歴史二二六

―室町ノ戦国の太子信仰―

早坂正章 神道宗教 四四

愚管抄の怨霊観

//

愚管抄の神仏観

小笠原春夫 歴史教育 五―八

中世の教団と葬祭儀礼

伊藤久嗣 大阪学芸大学紀要 一五

近江における村落の宗教性

内田秀雄 要 一五

―湖南の寺院を中心として―

清田義英 印度学仏教学研究 一六―一

中世僧侶集會に於ける議決方

萩原竜夫 歴史教育 五―八

法について

萩原竜夫 神道宗教 四六

中世神道の一考察

小笠原春夫 信濃 一九―一

熊野信仰伝幡の一考察

近藤義雄 和洋国文研究 五

―確永峠熊野神社の勧請をめぐって―

中島馨 仏教芸術 六六

熊野権現縁起考

鈴木昭英 国学院雑誌 六八―四

熊野曼荼羅と修験信仰

笹谷良造 神道学 五四

八幡根元信仰

江部陽子 神道宗教 四五

源頼朝と鶴岡八幡宮

園田健 神道宗教 四五

―宗教政策の一例として―

吉田神道と日蓮宗との交渉

―法華三十番神説をめぐって―

桜井好朗 日本文学 一六―一二

中世仏教文学の成立

榊原洋子 社会思想研究 一九―五

日本的ニヒリズムの系譜

榊原洋子 日本思想史研究 一

―中世の隠遁文学者・その一つの型として―

大塚智 国語と国文学 四四―七

「方丈記」の境涯と無常観

春日順治 国文学(関西大) 四一

閑寂に著するもさはりなる

鈴木弘道 国文学解釈と鑑賞 三二―一六

無名草子と仏教

萩原昌好 国文学解釈と鑑賞 三二―一六

―特に法華経との関係を中心として―

西行の世界

―「花」と「月」と死―

萩原昌好 国文学解釈と鑑賞 三二―一六

原平家物語の意味
—愚管抄と平家物語の関連—

富倉 徳次郎
文学 三五—六

世阿弥の幽玄の美的体系
西尾 実
文学三五—一一

平家物語と仏教

五来 重
国文学解釈と鑑賞 四三
日本文芸研究 一八—四

世阿弥における幽玄の美的展開
会所の文芸(上)
—日本文化小史—14—

村井 康彦
日本美術工芸 三四七

平家物語における死の形象

武久 堅

来迎図の構成
佐々木 正之

要(人文・社会科学)
二

源平盛衰記における武人像とその教育

奥山 悌三郎

研究紀要(三重大学教育学部) 三
文学三五—一一

高野山 // 聖衆来迎図 // の歴史的背景
—常行三昧から聖衆来迎へ—

濱田 隆

Museum 191

説話と軍記

今成 元昭

国文学 三—三

重源上人について
室町時代の日本人は中国絵画をどのように受けとめたか
—素描的な見直し—

国守 進

山口県地方史研究 一八

徒然草の思想と論理

石田 一良

文芸研究(日本文芸研究会) 三

「相應」の論の展開
—中世演劇論を中心に—

米倉 利昭

佐賀大学教育学部研究論文集 五

「つれづれ草」序段の一考察
—兼好的「つれづれ」試論—

大塚 智

文学 一二—一二

宮座の芸能(上・下)
—日本文化小史—

村井 康彦

日本美術工芸 三五〇・三五一

徒然草の宗教観

古田 紹欽

国文学 二—二

町衆と武将の芸術
—その衰微と消長—

水尾 比呂志

古美術 一六

徒然草の美学

梅原 猛

同朋学報 四—二五

伊勢流故実の形成

二木 謙一

国学院雑誌 六八—一二

兼好の人間的理解

藤井 智海

文学研究(日本文学研究会) 三

故実家伊勢氏の成立

倉沢 行洋

研究(神戸大) 四〇

兼好の信仰について

小沢 良衛

フェリス女学院大学紀要 四三

珠光の茶の思想(1)
—日本の芸術思想研究のうち—

村井 康彦

日本美術工芸 三四五・三四六

正徹における人間

小泉 和

国文学 四—三

茶徳と茶礼(上・下)
—日本文化小史—13・14—

黒木 俊弘

研究論文集(佐賀大学教育学部) 二五

短連歌から長連歌へ
—連歌論の萌芽とその背後—

島津 忠夫

相模女子大学紀要 二七

武道流派の成立と修験道

片野 達郎

東北大学教養部紀要 一

心敬・疎句体の意味するもの
(その二)
—中世文芸意識の研究—

井関 保

国文学(関西大) 四—一

中世における「自讃」の意味
について—自讃歌の研究—11—

石毛 忠

日本思想史研究 一

義堂周信の文学観と詩風

蔭木 英雄

文学 三—三

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

片野 達郎

日本思想史研究 一

日本芸術の理念(上・下)
—幽玄美の美学—

草薙 正夫

日本文芸研究 一八—一

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

歌論における幽玄論

志方 正信

哲学(三田哲学会) 五〇

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

花伝或問

中山 一義

中央大学文学部紀要 四六

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

「風姿花伝」から「花鏡」
—世阿弥の芸術意識の変移—11—

塚本 泰彦

中央大学文学部紀要 四六

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

「風姿花伝」から「花鏡」
—世阿弥の芸術意識の変移—11—

塚本 泰彦

中央大学文学部紀要 四六

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

「風姿花伝」から「花鏡」
—世阿弥の芸術意識の変移—11—

塚本 泰彦

中央大学文学部紀要 四六

南北朝時代における天の思想
—「梅松論」をめぐって—

石毛 忠

日本思想史研究 一

五条頼元について
—南北朝内乱期の政治思想—
 協同意識の源流
—中世都市の自治—
 莊園期における信託思想とその形態

森元正憲
 柳原範夫
 中村万太郎

九州史学三七・三八・三九合
 産業経済論叢
 中央学院大学論叢 一一一

柴田実著「中世庶民信仰の研究」
 赤松俊秀著「続鎌倉仏教の研究」
 宮崎博士還暦記念会編「真宗史の研究」
 戸頃重基著「鎌倉仏教—親鸞と道元と日蓮—」
 笠原一男著「親鸞研究ノート」
 戸頃重基著「日蓮の思想と鎌倉仏教」
 高木豊著「日蓮とその門弟—宗教社会史的研究—」

景山春樹
 松野純孝
 田中久夫
 坂東性純
 細川行信
 高木豊
 田中久夫

日本歴史二三三
 仏教史学三一
 日本歴史二三三
 仏教学セミナー
 三〇一六
 大谷学報一
 史学雑誌五
 日本仏教 二六

近世

特集・近代思想の源流
—江戸時代—
 江戸時代の儒教

思想の科学編
 相良亨

思想の科学六五
 講座東洋思想 一〇

江戸時代の教学
 藤原惺窩の思想系列について
 林羅山雑考
 播州吉川谷に於ける閻齋学派

栗田圭哉
 今中寛司
 福井保
 森下賤男

同朋学報 一四・一五合
 兵庫史学 四四
 書誌学 五
 兵庫史学 四七

「閻齋先生行状図解」の一徳本

増村宏

鹿大法文学部紀要
 人文科学論集 三

貝原益軒の宇宙観について
 徂徠集研究序説
 徂徠と葉水心との間
 陽明学の歴史的 성격
 小野原善言について
—北豊儒学史研究—
 徳川時代の偶像破壊者・富永仲基—その生涯と思想—
 広瀬淡窓の老子観—一・二—
(人間性研究の一環として)
 続本朝通鑑の一考察
 大日本史編纂事業と佐々宗淳の活動—下—
 頼山陽(上)—その個人生活—
 服部南郭の中華意識
 尾藤二洲の思想
—明和安永の朱子学—
 佐藤一斎に関する一考察
 橋南谿の稿本類について
 国学に対する批判について
 本居宣長の「もののはれ」論の源流について
 秋成と宣長—論争の経緯と対立の意味
 国学者の歴史意識について
—宣長の「神わざ」の説を中心に—
 国学における人間の問題
—本居宣長の現実肯定にみる人間苦について—
 本居宣長 一二・一三・一四・一五

牧克己
 今中寛司
 岩間一雄
 小林安司
 加藤周一
 大久保勇市
 安川実
 但野正弘
 中村真一郎
 高橋洋吉
 頼祺一
 田中佩刀
 太田昌二郎
 重松信弘
 小椋嶺一
 大久保正
 城福勇
 森磐根
 小林秀雄

支那学研究三二
 文化学年報一六
 人文学(同大) 一〇〇
 岡山大学法経学会雑誌一七一
 北九州大学文学部紀要 一
 思想 五五六
 芸文七二・八二
 歴史教育五二七
 芸林 一八一
 中央公論二一八
 中国古典研究四
 史学研究一〇二
 明治大学教養論集 三八
 東大史料編纂所報 一
 神道史研究一五
 竜谷大学仏教文化研究所紀要六
 国文学 一一一〇
 香川大学教育学部研究報告第一 二
 部研究報告第一 二
 神道宗教四 二
 新潮 六四一四
 六・八・一〇

新井白石の合理主義	羽仁五郎	思想の科学六五
新井白石と蘭学	宮崎道生	日本歴史二二四
司馬江漢の思想 —その実用主義と虚無主義—	藤原暹	日本思想史研究一
筑前蘭学事始考 —青木與勝の事歴を通じて—	杉本勲	九州大学九州文化研究所紀要三
海保青陵晩年の一問題 —二つの異なる史料をめぐって—	蔵並省自	日本大学文理学部研究年報一五
山片蟠桃の思想に関する一考察	伊藤光子	お茶の水史学二
横井小楠の学術と思想	山崎道夫	東洋研究 一三
徳川時代の「誠」	相良亨	倫理学年報一三
山鹿素行に於ける「性」と「善」	森下利明	〃
葉隠序説	松田修	国語国文三—二
吉田松陰の師道論	小野重仔	東洋文化(東洋文化振興会)二
吉田松陰武と儒による人間像 —八・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七—	河上徹太郎	文学界三一—二四・ 五・六・七・九・二〇・二二・ 三三—三三—
横井小楠における儒学の妥当性の問題 —人間のあり方をめぐって—	齋藤太郎	東京教育大学教育学部紀要一三
大阪町人の教育 —元禄町人を中心として—	芝野庄太郎	大阪学芸大学紀要(人文科学)五
貝原益軒の教育説について	古川清八	徳島女子短期大学紀要二
農村における寺子屋への就学率と寺子の性格について	利根啓三郎	日本歴史二二九
寺子屋における歴史教育の研究	吉田太郎	横浜国立大学教育学部紀要六
近世藩学に於ける学統学派の展開 —金沢藩について—	笠井助治	福井大学教育学部紀要一六
篠山藩振興徳堂について	松谷正治	武庫川女子大学紀要一四
町家における女子教育の構造 —近世末期を中心として—	入江宏	北海道教育大学紀要第一部C 一七—一
私塾教育論 二 —幕末期・長州藩における—	海原徹	京都大学教育学部紀要 一三
幕末の奈良の教育 —南都明教館について—	笹田治人	大和文化紀要 二一—六
近世本願寺教団における本末争論 —とくに興正寺の離反問題について—	千葉乗隆	竜谷大学論集 三八〇
近世本願寺教団における本末制度寺格の関係	児玉誠	日本仏教 二七
利休の禪について	本多良隆	東海大学紀要文学部 八
鈴木正三の研究 —職業観・芸術観—	村田昇	日本仏教 二七
江戸期における曹洞禅の自覚	石附勝竜	印度学仏教学研究 一五—二
近世における「日蓮聖人伝」の出版 —祖師信仰表出の一面について—	冠賢一	日本仏教 二七
本阿弥光悦の法華信仰	望月良晃	大崎学報一二二
カヤカベ教 —さつまのかくれ念仏—	星野元豊他	宗教研究四—三
カヤカベ教(2)さつまのかくれ念仏の歴史的背景	森竜吉	〃
江戸時代における大乘経論所説に関する論争考	山田行雄	真宗学 三三・三
慈雲の正法思想	新本豊三	広島大学文学部紀要 二五—一
幕末本願寺教団の護法思想の性格 —近代本願寺教団形成の思想前提として—	福岡光超	龍谷史壇 五八
近世における神職層と庶民信仰	米村昭二	岡山史学 二〇
吉川惟足の神道	岩田正義	神道宗教 四三

吉川惟足の生死観について
垂加学者としての遊佐木齋
—神儒論争の思想的意義—

安蘇谷 正道

乙 犬 拓 夫

中 島 董 市

キリシタン受容の背景
キリシタン禁制
踏絵の起源
—日本最古のキリシタン墓碑—

関 川 千代丸 覚

竹 村 村 明

H・チー スリク

芸備における宗門改
初期吉利支丹時代に於ける
イルマン・ロレンソの研究
—下—

村 田 明

千葉大学留学生
部研究報告 二

芸備地方史研究
六八

久留米大学論叢
一五

長野 一三

法政史学 一九

神道宗教 四六

宮城教育大学紀
要 一

神道宗教 四二

安蘇谷 正道

平 重 道

乙 犬 拓 夫

中 島 董 市

キリシタン受容の背景
キリシタン禁制
踏絵の起源
—日本最古のキリシタン墓碑—

関 川 千代丸 覚

H・チー スリク

芸備における宗門改
初期吉利支丹時代に於ける
イルマン・ロレンソの研究
—下—

「ますらをぶり」の考察(2)
—加茂真淵の実作における—
春雨物語と仏教
文政辛巳紀行
—佐藤一斎の伝記的研究—

服 部 善 美 子

浅 野 三 平

田 中 佩 刀

日本近世劇の家庭悲劇的性格
江戸時代における西洋詩の受
容状況
近世文人画の展開とその支持
層
田能村竹田の書の思想的背景
洋風画の背景(上)
—朱子学における窮理の思想を中心として—
十六世紀ヨーロッパ人と日本
文化(一・二)

河 竹 登 志 夫

千 葉 宣 一

木 代 修 一

中 村 直 之

横 田 博 罔

大 谷 忠 忠

倉 沢 行 洋

—特に茶の湯について—
珠光の茶の思想(一)
—日本の芸能思想研究のうち—

頼 祺 一

野 口 武 彦

玉 津 徳 太 郎

鬼 頭 有 一

若 林 喜 三 郎

城 福 勇

後 藤 広 子

鈴 木 暎 一

鶴峯戊申の思想
—その開国論を中心として—

愛知県立大学文
学部論集 一七

女子大國文四三

斯文 五〇

早稲田大学大
院文学研究科紀
要 一二

國語国文研究叢
要 一二

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

国語国文 二

国文学言語と文
芸 九—二

中国古典研究 五

国文学言語と文
芸 九—二

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

文学 三五—四
国文学 三二—七
賞 三二—七
国語と国文学
四四—一二
文学 三五—七
八・九・一〇
国語と国文学
四四—一二・三
文学 三五—一
印度学仏教学研
究 一五—二
大阪学院大学論
叢 八

愛知県立大学文
学部論集 一七

女子大國文四三

斯文 五〇

早稲田大学大
院文学研究科紀
要 一二

國語国文研究叢
要 一二

駒沢大学文学部
紀要 二五

東京学芸大学紀
要 一八

Museum 195

国学院雑誌
六八—七・八

神戸大学文学会
研究 四〇

芸備地方史研究
益・五・六

思想の科学 六五

日本大学文理學
部研究年報 一五

東洋研究 一三

日本歴史 二二七

〃 二三三

紀要(日本大学
精神文化研究) 四

茨城県史研究 九

〃 二三三

紀要(日本大学
精神文化研究) 四

茨城県史研究 九

〃 二三三

紀要(日本大学
精神文化研究) 四

茨城県史研究 九

〃 二三三

紀要(日本大学
精神文化研究) 四

茨城県史研究 九

橋本左内の外交観について —日露同盟論を中心に—	三上 一夫	社会文化史学三
攘夷論と開国論	三上 嘉明	史学研究 九九
阿蘭陀風説書についての一考 —上・下—	片桐 一男	日本歴史 二二六・二二七
「尚歯会」とその役割	筑波 常治	思想の科学六五
江戸湾防備政策の展開と海防掛	笹原 一晃	日本史学会研究 九
幕末日本と太平天国 —水戸藩のある庄屋の「見聞録」の記事にふれて—	小島 晋治	水戸論叢 三
東美濃平田学派の動向について	後藤 時男	信濃 一九一
「国体」思想の発生	尾藤 正英	思想の科学六五
幕末維新期の信州佐久郡農民と土地国有論	依田 憲家	歴史評論一九九
幕藩的農民倫理と農民的農民倫理	布川 清司	研究報告(愛知教育大)(人文科学) 一六
勤王家青木猛比古先生	下川 勝三郎	大分県地方史叢
志士の行動の原理	奈良本 辰也	現代の理論 一
真木和泉守における討幕思想の形成	山口 宗之	久留米工専研究 七
尊王討幕運動をめぐる諸問題 —上・下—	小川 常人	芸林 六三・四
水戸藩郷校の設立とゆくえ (中—1・2・3)	瀬谷 義彦	茨城県史研究 七・八
—尊攘派の形成と尊攘運動をめぐる— 横井小楠における世界認識と 変革の思想	子安 宣邦	理想 四一三
長岡監物の思想	和田 正俊	東洋研究 一三
近世日本の在野的農政思想 —その基本理念の分析を中心に—	鎌田 道隆	日本史研究八九
明清社会と江戸幕府の民衆的 教化思想—六論を一例として—	鈴木 健一	歴史教育 一五—九・一〇
儒教の自己変革と民衆 —大塩平八郎について—	宮城 公子	史林 四九—六

歴史形成者としての民衆 —幕末維新期、大坂近郊農村の上層農の場合—	布川 清司	倫理学研究一三
江戸時代初期の経営理念	竹中 靖一	商経学叢(近畿大) 三二
京都商人杉浦家の家則	岡 光夫	経済学論叢二六—二
近世商家の主婦の教養生活 —江戸木綿問屋「佐孝」の妻女の日記—	入江 宏	人文論究(北教大) 二七
協同組合思想の源流に関する一考察 —特に漁法と入会漁業について—	新田 貞章	和光経済創刊号
「都鄙問答」の経済(商業)思想と経済政策の間	大石 慎三郎	前近代アジアの法と社会
石田梅岩の経済的合理主義	竹中 靖一	商経学叢 二七
石田梅岩から海保青陵へ、さらに神田孝平へ	本庄 栄治郎	〃
林子平の経済論と学校論	多田 顕	文化科学紀要九
寛政期城下町商人の思想	藤田 貞一郎	商品流通の史的 研究
近世国学研究の現段階	井上 豊	国文学一二—六
国民文化の形成と化政文化 ある名望家の思想と生活	森谷 尅久	芸能史研究一八
独医 Kaempfer の「日本誌」とその日本思想界に及ぼした影響	加藤 秀俊	人文学報 二四
シーボルトの渡来とその日本文化に及ぼした影響	岩生 成一	日本学士院紀要 二五—一
権力否定の先駆者たち「江戸期思想家」	池田 哲郎	福島大学教育学部論集 一八
キサトウスの「日本諸島実記」と西洋刊行最古の日本地図 —正誤及び補遺—	市井 三郎	思想の科学六五
スウェーデン植物学者「トウエンベリー C:Thunberg」の見 た十八世紀の日本	石田 幹之助	ビブリア 三六
	田沼 利男	早稲田商学一壺

寛永文化の継承者
—「洛陽名所集」の著者とその父—

熊倉功夫 史潮 一〇一

山本神右衛門常朝年譜、本文篇

松田修翻刻 文芸と思想三〇

永井啓夫「寺門静軒」

野口武彦 国語と国文学 四四—五

杉浦明平著「維新前夜の文学」

文学 三五—八

奈良本辰也編「近世日本思想史研究」

頼 祺一 史学研究 九八

阿部吉雄著「日本朱子学と朝鮮」

岡崎精郎 朝鮮学報 三五—四

今中寛司著「徂徠学の基礎的研究」

前田一良 立命館大学 二五

今中寛司著「徂徠学の上」

石毛忠 文化史学 二一

藤田貞一郎著「近世経済思想の研究」

水田紀久 文化史研究一九

柴田一著「近世豪農の学問と思想」

島崎隆夫 社会経済史学 三三—一

石井良助著「江戸の離婚—三行り半と縁切寺」

藤田貞一郎 // 三三—四

サンソム著「西欧世界と日本」

荒井貢次郎 法制史研究一七

天草・島原之乱関係文献目録

竹山道雄 自由 九—四

心学及び教訓物蔵書目録

熊本史学三二 紀要(日本大学精神文化研究所) 四

佐藤信淵研究文献目録

渡辺与五郎 亜大経済学紀要二

近代

幕末維新と英国近代思想
—一九六六年大会シンポジウムのために—

山下浩 史学研究 九八

明治啓蒙思想の形成(1)(2)(3)
—西洋観の転回との関連において—

植手通有 思想五一—一・五

近代史学の源流
—明治期における民間史学を中心に—

高橋通泰 史潮 一〇〇

明治時代民衆倫理思想の一考察
わが国における西洋哲学思想の形成
—西洋哲学受容の思想的背景—

笠井貞 倫理学年報一四

大正・昭和期における哲学の展開
戦前日本憲法学における「基本権」の観念

飯田賢一 白山哲学 五

西周から松本亦太郎まで
西学者西周序説(附録参考資料一覽)

竹内良知 東洋学術研究 六一—三

西周の功利主義
—その国家的関心と個人主義的方法—

奥平康弘 社会科学研究 一八—六

西周の「行門の論理」とその適用

関計夫 教育学部紀要(九大) 一一—一

福沢諭吉論
福沢諭吉における個人と国家の問題

福鎌達夫 文化科学紀要九

福沢における「抵抗」の論理の展開
—近代日本の政治倫理—(一)—

洪川久子 倫理学年報一六

福沢諭吉と森鷗外
—その帝室論について—

小泉仰 哲学(三田哲学会) 五〇

西洋文明との出会いの心理(四・完)
—森鷗外の洋学論をめぐって—

佐藤直助 世紀 二一〇

若き日の穂積八束
—明治日本の保守主義的承譜の起源に關する新資料—

山田洗 倫理学年報一五

実学と漢学
伊藤博文の場合—

西田毅 同志社法学 一八一—二

杉亨二の学問と思想
—明治の忘れられた思想家像—

荒川久寿男 皇学館大学紀要 五

東洋哲学の使命
—井上丙了の思想—

平川祐弘 自由 九—二

東洋哲学の使命
—井上丙了の思想—

R・H・マイネア 思想 五一—三

東洋哲学の使命
—井上丙了の思想—

中村宏 東洋研究 一三

東洋哲学の使命
—井上丙了の思想—

塚谷晃弘 史学雑誌 一八

東洋哲学の使命
—井上丙了の思想—

西義雄 宗教研究 一三

西村茂樹論

河邑光夫

思想 五二二

西村茂樹の国家道德論

山田 洸

倫理学年報一六

明治のモラリスト

海原 徹

社会福祉評論三

カントと西田哲学

一柳 富夫

専修大学論争四

西田哲学とマルクス主義

古田 光

哲学 一七

西田哲学の位置と意義

〃

思想 五一七

和辻哲郎論

A・マタイス

世紀 二〇三

和辻哲郎と「空の弁証法」

山田 洸

倫理学年報一四

西田先生の生涯と学問

柴田 実

史窓 二五

三木清とセーレン・キルケゴール

小川 圭治

東京女子大比較文化研究所紀要 二二

マルクス主義哲学と意識の問題

山田 宗陸

現代の理論一六

三谷隆正の国家哲学

田中 収

社会科学論集(市郵大)二

戸坂潤とその時代

古在 由重

文化評論 六四

近代における日本人の教育観

神島 二郎

思想 五二二

近代国民教育の思想構造

柳 久雄

大阪芸芸大学紀要(人文科学)五

明治教育思想の再検討

森 章博

キリスト教社会問題研究 一一

自由主義教育思想の日本的展開

木下 繁弥

人文学報(都立大)六〇

明治前期社会教育思想の系譜

橋口 菊

聖心女子大学論叢 二八

福沢諭吉の教育思想

安川 寿之輔

社会科学論集(市郵大)二

日本近代大学成立史の研究

二見 剛史

九州大学教育学部紀要 一二

西村茂樹の道德教育観

山本 哲生

紀要(日本大学精神文化研究所)四

明治教育の法制化過程

伊藤 和衛

教育学研究 三三―四

「教育令」制定とその改正

杉谷 昭

九州史学三七・三八・三九合

明治二十年代における学制改革問題の研究(三)(四)

内田 紘

愛知学院大学論叢 一三・一四

明治二・三十年代に於ける独逸教育学の影響

石山 禎一

法政史学 一九

明治前期農業指導者の農業教育観

片山 清一

紀要(日本大学精神文化研究所)四

その目標としての農民理想

川瀬 八州夫

東京家政大学研究紀要 七

近代日本教育思想史研究一・二

鹿野 政直

思想 五二一

戦後経営と農村教育

奥田 修三

立命館産業社会論集 二

大正期における軍国主義教育批判

小田切 正

教育学研究 三四―一

芦田恵之助研究

大浦 猛

東洋学術研究 六一―三

大正・昭和期における教育理念の変遷

水内 宏

教育学研究 三四―一

沢柳政太郎の教育と思想

小沢 有作

朝鮮研究 五六

同化教育の歴史

斎藤 太郎編

教育学研究 三四―一

「人物・新教育運動史」文献目録

片山 正直他

関西学院大学共同研究紀要 一

明治時代の宗教状況の研究

片山 正直他

関西学院大学共同研究紀要 一

二

二

二

波多野宗教哲学における人格主義——二——

泉 昭雄

西南学院大学文学部
理論集七——一・二、八一—

明治仏教の研究——

角田 春雄

印度学仏教学研究
一五——二

明治期の仏教

雲 道義

講座東洋思想
〇

明治期における仏教近代化の問題点

〃

印度学仏教学研究
一五——二

明治における近代仏教の歴史的形成

柏 原 祐 泉

〃

日本近代仏教における護法論の形成過程

池 田 英 俊

〃

明治仏教
——国家権力との関わりを中心として——

福 嶋 寛 隆

龍谷大学仏教文化研究所紀要六

日本における仏教社会福祉の形成過程
——胎動期としての明治期について——

森 永 松 信

立正大学人文科学研究所年報五

明治初年本願寺教団の思想動向
——維新政府の宗教政策に対する本願寺教団僧侶の態度——

福 間 光 超

龍谷大学論集
三八—

近代真宗思想史における世俗性——岩倉書簡をめぐって——

二 葉 憲 香

真宗研究 一二

倉田百三と浄土教

堤 玄 立

印度学仏教学研究
一五——二

神仏分離に関する一考察
——東京西郊の三十番信仰を中心にして——

園 田 建

神道宗教 四二

防長における神道教化史の一構想

伊 藤 忠 芳

山口県地方史研究
一八

神道家、国学者としての福羽美静

阪 本 健 一

神道宗教 四八

宣教師に於ける講義

藤 井 貞 文

〃 四七

護国神社制度の創設

梅 田 義 彦

神道史研究
一五——五・六合

加藤弘の一側面
——彼のキリスト教排撃をめぐって——

大 道 安 次 郎

関西学院大学社会学部紀要一四

The Tenrikyo Overseas Mission Department ed "TENRIKYO ITS HISTORY AND TEACHING" 1966

宮 田 元

ビブリア 三五

農民系宗教の歴史と構造(4)
——日本資本主義と天理教団——

阿 部 吉 夫

経済論集(北海学園大) 一八

日本近代社会の形成とキリスト教

吉 田 久 一

日本史の研究 五六

明治初期におけるキリスト教伝道とその発展

松 本 治 三 郎 他

関西学院大学共同研究紀要一

明治思想史における自由キリスト教提唱の意味

杉 井 六 郎

キリスト教社会問題研究 一一

神戸キリスト教史 I
——禁教の時代——

藤 原 美 幸

歴史と神戸 二八・二九合

アメリカン・ボード日本布教報告書の研究

川 村 大 膳

関西学院大学共同研究紀要一

自由民権思想とキリスト教

平 岡 敏 夫

国文学解釈と鑑賞 三二—三七

大隈重信とフルベッキ

尾 形 裕 康

早稲田大学史紀要 一一—一

山路愛山の思想とキリスト教
——「日本の思想史上におけるキリスト教の位置」——

今 中 寛 司

キリスト教社会問題研究 一一

明治の基督者群像
——金森通倫を中心として——

杉 井 六 郎

人文学報 二四

植民地伝道と織田樞次

安 藤 肇

世界 二六二

内村鑑三の人間観

室 田 泰 一

岐阜大学教育学部研究報告(人文科学) 一五

内村鑑三の無教会主義とピエウリタニズムの教会観

小 笠 原 政 敏

東北学院大学論集(一般教育) 吾

内村鑑三の歴史意識

松 沢 弘 陽

北大法学論集 一四・一六—二

内村鑑三おぼえ書き
——三・四——

岩 谷 元 輝

人文研究(神奈川大) 三・三

有馬四郎助抄伝

三 吉 明

日本歴史 二三一

安部磯雄とトルストイ	木村 毅	早稲田大学史紀要 一〇一
明治期の片山潜	辻野 功	キリスト教社会問題研究 一一
特集・日本文学とキリスト教の利害		国文学解釈と鑑賞 三二―三七
蘆花の復活思想と終末観	阿部 光子	〃
三谷隆正の信仰と思想	高尾 正男	関西大学法学論集 一六―四・五・六
明治十六年におけるキリスト教運動(一)	佐々木 敏二	キリスト教社会問題研究 一一
小野村林蔵の人と思想 ―特に戦時中におけるキリスト教(プロテスタント)と国家神道の対立をめぐって―	金田 隆一	苦小牧工専紀要
近代文学における自我の解放について	大伴 傑人	東洋学術研究 六一―一
明治維新と文学 ―虚実の系脈― ―明治初頭の小説意識―	松島 栄一 磯貝 英夫	国文学 三―一二 国文学攷 四三
明治初期文人の中国小説趣味	前田 愛	国文学言語と文芸 九―一二
自由民権運動と文壇 ―透谷、独歩のアンビションを中心に―	平岡 敏夫	国文学 三―一二
新透谷像の出現 ―平岡敏夫氏の近業に寄せて―	色川 大吉	思想 五二―二
透谷と愛山 ―文学概念の対立をめぐって―	中山 和子	文学三五―一二
日本浪漫派とナシヨナリズム	和泉 あき	日本浪漫派研究
ローマン主義文学とキリスト教	河村 政敏	国文学解釈と鑑賞 三二―三七
植村正久と内村鑑三の文学観	佐古 純一郎	〃
森鷗外論の方法論的批判	松尾 瞭	学習院大学国語国文学会誌一〇

森鷗外論における一つの精神のあり方	三浦 泰生	日本文学二六―三
鷗外歴史小説序説	磯貝 英夫	文学三五―一一
夏目漱石における地方社会と西欧社会	鹿野 政直	日本歴史二三―二
福沢諭吉と夏目漱石・菊池寛 ―彼らをつなぐ幾筋かの系について―	伊藤 正雄	甲南大学文学会論集 三五
夏目漱石論 ―自我の戦い―	磯貝 昭太郎	世紀 二〇五
夏目漱石と明治国家 ―松山ゆきまで―	鹿野 政直	史観 七五
漱石の「人生論覚え書」(資料紹介)	北住 敏夫	文化 三〇―四
夏目漱石とキリスト教	佐古 純一郎	国文学解釈と鑑賞 三二―六
夏目漱石における倫理観補論	山田 晃	駒沢大学文学部研究紀要 二五
石川啄木小論 ―「大逆事件」真相究明の基底と発展―	鈴木 馨	文化評論 六四
有島武郎の思想構造とその問題性	松 下 美那子	日本文学 一六―一一
芥川文学とキリスト教 ―作風の変化を中心に―	河村 清一郎	明治大学教養論集 三八
大正アナーキズムと文学 ―大杉栄と荒畑寒村―	森山 重雄	人文学報 五六
岡倉天心ノート	井上 正蔵	茨城県史研究 六八―四・五
岡倉天心の「衝動」 ―内と外からの日本文学― 3	佐伯 彰一	文学界二一―三
天皇制イデオロギーの成立過程	大江 志乃夫	思想の科学六五
刑法制定史にあらわれた明治維新の性格 ―日本の近代化におよぼした外国法の影響・裏面からの考察―	西原 春夫	比較法学三一―一

明治維新と国家護持の精神

小川 常人

神道史研究一五
一五・六合

天賦人權説に基づく「小野梓宇
内合衆政府」論
—日本(世界)最初の世界連邦宣言
(一八七〇年)—

時子山 常三郎

早稲田大学史紀
要 二一—

田口卯吉論
議會開設前後における福沢論
吉の政論
—その国会論を中心として—

馬場 啓之助
池内 啓

一橋論叢書—四
福井大学教育学
部紀要(社会科学
学) 一六

福沢諭吉の「清末交際始末」
とアロー戦争太平洋
法意識の形成からみた福沢諭
吉の政治観

和 田 博 徳

史学四〇—二・三

明治二年の社家制法

森 田 康 夫

日本歴史二二七
神道宗教 四八

森有礼研究(1)
—森駐米代理公使の辞任—

梅 田 義 彦

研究年報(東北
大教育学部) 五
世紀 二〇七

森有礼論
明治前期の自然法思想につ
いて

織 田 陽 二

社会学論叢三九

「明治社会主義」の形成
—平民社成立期までの歩み—

定 平 元 四良

文化史研究一九

士族民権の抵抗の論理

板 垣 隆 明

日本歴史二二九
ビブリア 三五

土倉家文書について(1)
—その来歴と自由民権家書翰—

平 井 良 明

弘前大学国史研
究四八・四九合

北奥羽の自由民権論者角鹿忠
四郎について

稲 葉 克 夫

西南学院大学経
済学論集二—一

明治後半期における藩閥政府
と政党
—原敬の価値観について—

横 溝 軌 一

日本史研究九四

第一次大戦後の教化政策
—日本帝国主义時代の思想支配について—

尾 川 昌 法

北海道教育大学
紀要第一部B
一七—一

陸羯南論
—そのナショナリズムの論理—

ひろた・まさき

日本史研究九一

帝国主义としての民本主義
—吉野作造の対中国政策—

宮 本 又 久

日本史研究九一

民本主義の誕生
—浮田和民を通じて—

宮 本 又 久

史林 五〇—二

大杉栄の社会思想の特質と意
義
大杉栄論序説

小 山 仁 示

史泉 三三三

大正デモクラシー運動と大学
評論社グループ
山路愛山の国家社会主義(一)
—明治ナショナリズムの一断面—

高 野 澄

日本史研究八八

北一輝の戦争観
—「国体論及び純正社会主義」分析IV—

太 田 雅 夫

同志社法学 一〇二

国家社会主義の思想的史的
構造
—山路愛山・高畑素之・北一輝の思
想を中心として—

木 村 時 夫

早稲田大学人文
自然科学研究一
歴史研究(大阪
教大) 五

明治の知識人
—「共存同衆」と小野梓—

岩 附 実

季刊社会科学三

北一輝の革命観
—「国体論及び純正社会主義」分析—

石 坂 富 司

人文科学(京大)
二四

北一輝研究史序説—二—
—社会進化論より再臨信仰へ—

岩 瀬 昌 登

大阪学芸大学紀
要(人文科学) 五

内村鑑三の政治思想(上)
—社会進化論より再臨信仰へ—

石 谷 浩

日本歴史二二〇

公安条例の思想と現実
—その法哲学と法社会学—

小 林 直 樹

明治学院論叢研
究年報(法学) 一

大正・昭和期におけるナシヨ
ナリズムの勃興と性格

吉 村 正

法律時報 一三

大山郁夫の民本主義論
大山郁夫の民本主義思想
大山郁夫の昭和期における政
治思想

太 田 雅 夫

東洋学術研究
六一三

加藤弘之の転向
明治期の報徳社運動の史的社
会的背景(二)

進 藤 敏 一

同志社法学
一八一三

日本フェビアン協会
—社会民主主義思想の萌芽—

西 田 照 見

史潮 一〇一

桐 村 彰 郎

法学志林 一〇二

法学雑誌(大阪
市大) 一四—二

江 守 五 夫

法律論叢(明大)
四〇—二・三合

史泉 三三三

小山 仁 示

史泉 三三三

史泉 三三三

英国自由主義とその日本への「移植」	山下 浩	史学研究 九九	水平社と人権宣言	木村 京太郎	部落 一九一二
日露戦争後における新しい世代の成長(上・下)	岡 義武	思想 五三・五三	明治期における部落解放論 —その社会思想的考察—	工藤 英一	経済論集 九 (明治学院大学)
明治の社会主義者	山 極 圭 司	現代の理論 五一	五四運動と日本人 —同時代の反応と研究史—	嶋 本 信 子	史潮 一〇〇
「明治社会主義」の形成 —平民社設立期までの歩み—	板 垣 隆 昭	文化史研究 一九	水野広徳の反戦平和思想	家 永 三 郎	思想 五一九
明治の日本人における在野精神の形成 —東京専門学校を中心に見たる—	本 山 幸 彦	人文学報 二四	福沢諭吉の取引所投機・投資論	小 竹 豊 治	三田学芸雑誌 六〇—一〇一 法経論集 二二 (静岡短大)
赤羽一に関する覚書 —明治社会主義思想の一つの形成過程—	藤 田 美 実	明治大学教養論集 三七	日本資本主義の発展と言論の自由 —明治前期を中心として—	熊 倉 倉 娃 子	林業経済 一九一三
ロシア第一次革命と幸徳秋水	飛鳥井 雅 道	思想 五二〇	或る明治林業人の思想と行動 —吉野における土倉庄三郎の生涯—	小 川 誠	
キリスト教と社会主義 —木下尚江を中心として—	土 肥 昭 夫	国文学解釈と鑑賞 三二—三七		吉 田 静 一	経済貿易研究 四
木下尚江の国体観	貞 末 貴 一 郎	都大論究 六	「新歴史観」としての近代化論	戒 田 郁 夫	関西大学経済論集 一六—三
福田英子における婦人観の軌跡	大 木 基 子	歴史学研究 三六	「近代化」論と日本の近代化	和 田 春 樹	歴史学研究 三二二
明治の新聞の変動の過程 —二十年代初期の動向をめぐって—	塩 原 勉 他	関西学院大学共同研究紀要	現代的「近代化」論とわれわれの歴史学	伊 原 吉 之 助	社会思想研究 一九一七
明治三十年代前半「東朝」時事」の読者層 —商工読者層を中心に—	山 本 武 利	一橋研究 一四	近代化に関する若干の覚え書き —近代化ゼミナール報告—4—	久 山 康 他	関西学院大学共同研究紀要 一
大正・昭和期の言論統制下におけるマスコミュニケーションの状況	生 田 正 輝	東洋学術研究 六一—三	日本の近代化と伝統	市 井 三 郎 他	思想の科学 五九
第一次大戦後の労働運動思想の推移(上・中・下)	渡 部 徹	日本労働協会雑誌 一〇三・一〇三・一〇四	文明開化論への一視角 —日本史研究講座—1—	鹿 野 政 直	日本歴史 二二八
ロシア革命と日本労働者階級 —民本主義からの脱出とサンジカリズムの克服—	篠 藤 光 行	唯物史観 五	思想史のシンポジウムで感じたこと	頼 祺 一	史学研究 九九
北一輝の処女出版と言論界の反響	石 坂 富 司	日大史学会研究彙報 九	明治維新論と「近代化論」	大 谷 瑞 郎	武蔵大学論集 一四—三・四
			明治維新の思想的基盤	松 浦 玲	日本史研究 九〇
			「明治百年」論と維新史研究	芝 原 拓 自	思想 五一—

丸山思想史学の批判的再評価

—日本近代社会経済思想史の対象と方法にかんする若干の考察(一)の(1)—

△農本主義V思想のとらえ方について

—日本近代化への△対抗思想Vとして—

日本資本主義の思想としての「家族国家観」

明治初期における中国観

紀元節復活と神社神道

南北朝正閏問題始末

加藤弘之と社会的ダーヴィニズム

清仏戦争と日本人の中国観

柳田国男の抵抗精神

—農本主義批判を中心に—

親鸞と服部之総

—マルキシズムの根底にあつたもの—

思想家としての河合栄治郎

—「河合栄治郎全集刊行記念講演」—

日本人の思想 (2)

—津田左右吉の精神と内容—

色川大吉著「明治精神史」

稲生典太郎著「日本外交思想史論考第一—条約改正論の展開—」

海後宗臣著「教育勅語成立史の研究」

桑原武夫編「中江兆民の研究」

松尾尊兌著「大正デモクラシーの研究」

柳田泉著「明治初期の文学思想—上・下—」

三田学会雑誌 六〇—一二

明治大学社会学研究所紀要 五

経済学研究(北大) 一七—二

歴史教育 五一—

日本史研究 九一

舞鶴工専紀要 二

社会学論叢 三七

思想 五一—二

思想の科学 六七

〃 六九

社会思想研究 一九—二

人文論集(早大法学会) 四

社会科学討究 一二—二

法学研究(慶大) 四〇—七

史学雑誌 七—四

社会科学討究 一二—二

歴史学研究 三五

国文学研究 三五

比較文学 九

赤瀬雅子

畑実

竹村民郎

河原宏

大久保利謙

池井優

鹿野政直

森竜吉

木村健康

後藤靖著「自由民権運動の展開」

松本三之介著「近代日本の政治と人間」

藤田省三著「維新の精神」

家永三郎著「日本近代憲法思想史研究」

戸頃重基著「近代日本の宗教とナシヨナリズム」

稲垣忠彦著「明治教授理論史研究」

最近における透谷研究の展望

色川大吉 日本史研究 八八

中村尚美 社会科学討究 十二—二

市井三郎 世界 二五九

山中永之佑 法律時報 一六

岡本幸治 産業経済論叢 二—一

三枝孝弘 教育学研究 三四—二

安住誠悦 国文学 一二—三

三田学会雑誌 六〇—一二

発刊の辞

東北大学法文学部の開設とともに、故村岡典嗣氏を初代の主任教授として日本思想史学専攻が設立せられたのは大正十二年のことである。

昭和二十一年春、村岡氏が定年退官せられて後、後任者の得難きままに九年余を経て、昭和三十年に故竹岡勝也氏が就任せられた。しかし竹岡氏も在職二年にして定年退官せられ、一年を経て昭和三十三年に私が両教授の芳蠟をけがすことになった。

本専攻の学部（第三・四年）は「日本思想史学専攻」として文学部史学科に属し、大学院（修士・博士課程）は「国文学国語学日本思想史学専攻」として文学研究科に属している。日本思想史学の独立の講座を基礎として、日本史（国史）専攻、乃至は国文学専攻または倫理学専攻とは別に、独立した「日本思想史学専攻」が設けられているのは、東北大学のみである。

以上の如き本専攻の歴史と現状に鑑み、関係者相い諮って、専攻専属の機関誌として、本誌を刊行し、その研究・教育の状況を学の内外に紹介することにした。大方の御援助を仰ぐ次第である。

昭和四十二年三月

石田一良

日本思想史研究 第三号

昭和四十四年三月十八日 印刷

昭和四十四年三月二十五日 発行

頒価 三〇〇円
送料 四五円

編集代表者 石田一良

仙台市清水小路六

印刷所 丹野印刷株式会社

仙台市片平丁

発行所 東北大学文学部

日本思想史学研究室